

日本再生医療学会顧問、大阪大学第一特定認定再生医療等委員会委員長、

日本医療研究開発機構（AMED）再生医療製品の国際化研究班員、厚生労働省 iPS 細胞等の臨床応用安全性に関する研究班員、厚生労働省食品安全研究事業評価委員、国際雑誌 Biologicals 編集委員：堅い雰囲気の肩書きだけでも、まだまだ続く。

加えて受賞歴も数多い。瑞宝中綬章受章、文部科学大臣表彰 科学技術賞（研究部門）受賞、歴代、米国バイオ医薬研究者が占めている William S Hancock 賞を唯一外国人として受賞、日本再生医療学会功績賞受賞…。

どこか気難しさの漂う肩書きと受賞歴だが、現れたのは笑顔が朗らかな早川堯夫さん。

「現在は、晴れて年金を受け取る後期高齢者となりました（笑）。だから、勤め先がないのに名刺というのもおかしなものなんです。連絡先という意味でお渡ししています」と差し出された名刺には、大阪大学大学院 医学系研究科 招聘教授とあった。実は早川さん、遺伝子組換え技術や細胞培養技術等を用いて製造したタンパク質、遺

伝子や細胞を有効成分とするバイオ医薬品研究の第一人者なのだ。

何かを尋ねるとその前段から詳細な説明がある。きつと生来、何事にも「なぜそうなのか」と思う好奇心の持ち主ではないかと推察。しかし、ご本人いわく「子どもの頃は内気で特徴のない子でしたよ（笑）。勉強が嫌いだね」

地元の助任小学校から徳島中学へ進んだ。小学校の文集に書いた将来の夢は、サラリーマンになりたいだった。とはいえ、早川少年の夢のサラリーマン生活は偶然と必然のさまざまな出会いによって果てしなく広い世界に向かうことになるのだが。

中学時代。当時徳中の教頭だった父親が学業成績を嘆いて息子に期待したのが、野球。ある日突然、野球道具一式が用意されていた。

「従兄弟がプロ野球でピッチャーやったり、叔父が国鉄スワローズの監督をやっていた。勉強が駄目なら野球で身を立てられないかと（笑）」

ところが早川少年、ボールを遠くに

投げられない、走るのも早くないことが分かり、1カ月で諦めた。

さて高校進学。当時、男子は城南高校へ、女子は城東へというのが一般的な考えだった。

「父からも、男なら城南へ行けと言われてきました。でも、なぜ男ならなのか？城南に入ると勉強をもっと頑張らないといけない」、こもごも思いもあり城東高校を受験した。中学で仲の良かった友人はすべて城南へ行った。

入学後、友人達の影響で卓球部に所属し、中学からの経験者に伍してレギュラーになるべく夢中で練習をした。結果、県代表で四国大会出場できるほど。おかげで学業成績はさっぱり。

息子の将来を案じた父に「大学くらい行くのだから？」と薬学部を勧められる。父親の知人が薬局を開いており、自分もやりたいと思ったようだ。

「薬局を開くには資格が必要だから、薬学部へ行けということでした。国立、それも地元にしると」

当時、中国・四国地方で国立大学の